

診 療

若年期発症の巨大卵巢成熟嚢胞性奇形腫の異時性発症例

秋田大学医学部産科婦人科学教室

大山 則昭 佐藤 宏和 畑沢 淳一 軽部 彰宏
高橋 道 太田 博孝 田中 俊誠

A Case of Left Ovarian Mature Cystic Teratoma (OMCT) Following Surgery for the Right Huge OMCT in Adolescence

Noriaki OHYAMA, Hirokazu SATO, Junichi HATAZAWA, Akihiro KARUBE,
Osamu TAKAHASHI, Hirotaka OTA and Toshinobu TANAKA

Department of Obstetrics and Gynecology, Akita University School of Medicine, Akita

Abstract Ovarian mature cystic teratoma (OMCT) in children and adolescents is rare. The authors report the case of 19-year-old Japanese woman with a left OMCT. She underwent surgery for removal of a huge right OMCT (weight: 770g) the age of 8 years. Her serum level of CA125 was slightly high (55U/ml). Malignant transformation was not found on histological examination of either of her OMCTs.

Key words: Ovarian mature cystic teratoma • Ovarian cyst in adolescence

緒 言

卵巢成熟嚢胞性奇形腫は外胚葉成分を主体とする三胚葉成分を含んでいるといわれている良性疾患である。比較的よく臨床の場でみられる疾患であるが悪性転化例もあり注意が必要である。好発年齢は30歳代であり、小児期に発症することは稀である。今回我々は、8歳時に770gと大きな右卵巢成熟嚢胞性奇形腫の核出術を施行され、11年後に対側卵巢に成熟嚢胞性奇形腫を発生した症例を経験したので文献的考察を加え報告する。

症 例

患者：F.A., 19歳，学生。

主訴：下腹部痛。

家族歴：母；甲状腺良性腫瘍。

妊娠歴：0妊0産。

既往歴：7歳；肺炎，8歳；右卵巢成熟嚢胞性奇形腫にて核出術(当院小児外科)(標本重量770g)。

月経歴：初経；10歳，28日型，整順。

現病歴：平成9年5月20日少林寺拳法練習中腹部を打撲し下腹部痛にて近医受診した。CT検査，

および超音波検査にて約6cmの卵巢腫瘍を認め、6月17日精査目的に当科紹介受診となった。

身体所見：身長；156cm，体重；48.1kg，BMI；19.8，BP；110/66mmHg。

内診所見：子宮は正常大。ダグラス窩に可動性良好の驚卵大の腫瘍を触知した。

入院時検査所見(表1)：末梢血液，生化学検査成績に異常所見はなかった。腫瘍マーカーにてCA19-9が，125.8U/mlと上昇していた。

腹部超音波検査：ダグラス窩に，内部に一部 high echoic な部分を含む，約6cmの low echoic な腫瘍性病変を認めた。

骨盤MRI検査：子宮右側から上方にかけて8×6cmの chemical artifact を認める多房性腫瘍が存在し，内容は脂肪成分を主とし，内部に hair ball を認めている(図1)。

入院後経過：以上の血液・画像所見より，卵巢成熟嚢胞性奇形腫と診断した。胸部X線，心電図，呼吸機能等の術前検査に異常所見なく手術適応となった。

手術所見：淡血性腹水を少量認めたが，子宮は

表1 入院時検査成績

末梢血液像		血液生化学	
WBC	4,300/mm ³	CRP	0 mg/ml
RBC	432×10 ⁴ /mm ³	TP	7.0 g/ml
Hb	11.0 g/dl	Alb	4.7 g/dl
Ht	34.2 %	BUN	15 mg/ml
Plt	22.7×10 ⁴ /mm ³	Cre	0.7 mg/dl
腫瘍マーカー		GOT	12 U/l
CA19-9	125.8 U/ml	GPT	7 U/l
CA125	32.7 U/ml	ALP	76 U/l
SCC	1.3 ng/ml	LDH	152 U/l
CEA	1.8 ng/ml	TB	0.3 mg/dl
α-fetoprotein	3.2 ng/ml		

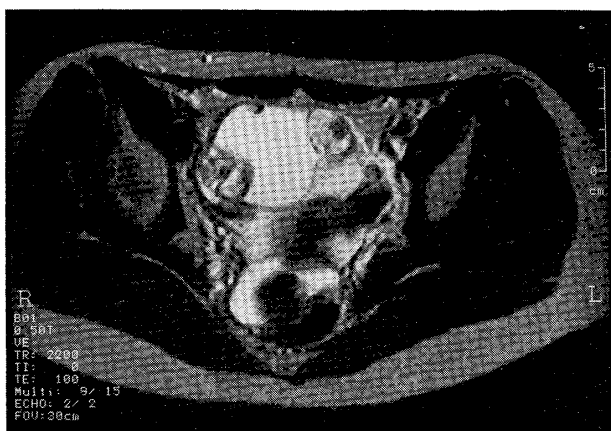


図1 骨盤MRI(T2強調横断面)

子宮の上方に嚢胞性腫瘍を認める。腫瘍内部には, hair ball を認め, 成熟嚢胞性奇形腫の所見である。

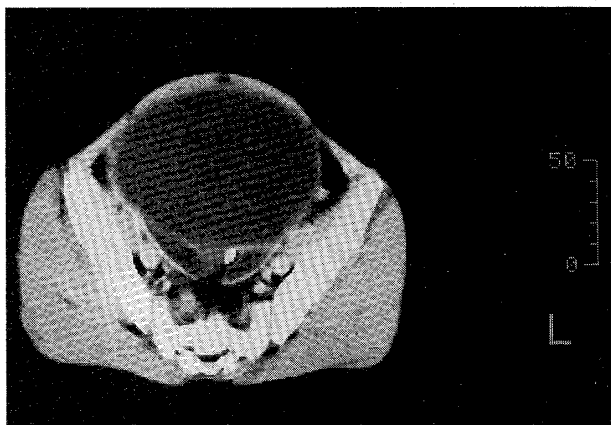


図2 骨盤CT(8歳時の術前CT)

骨盤内部を占拠する嚢胞性腫瘍を認める。内部に石灰化や fatty density を示す部位が含まれており成熟嚢胞性奇形腫の所見である。

正常大であった。8歳時に核出手術をした右卵巣は萎縮し, 後腹膜に埋没していた。左側卵巣は驚

卵大に腫大していたが, 癒着は認めなかった。嚢腫を2個認め, 核出術を施行した。標本重量は110 g であり, 内容は脂肪が主体で, 一部毛髪を認めた。

術後経過: 特変なく順調に経過し術後8日目に退院となった。

病理組織学的検査: 皮膚組織や脂肪組織および少量の神経線維束を認め, 成熟嚢胞性奇形腫の所見であった。

考 察

卵巣成熟嚢胞性奇形腫は, 外胚葉成分を主体に三胚葉成分を種々の割合で含んでいるとされている。

組織起源に関しては, 一時, 第二減数分裂の異常によって生じた2倍体胚細胞を起源とすると考えられたが, 現在では第一分裂後の一つの胚細胞から生ずる単為生殖性の腫瘍とする説¹⁾が広く認められてきている。

卵巣成熟嚢胞性奇形腫の患者年齢は広い範囲に分布しているが, 30歳代に最も多いと報告²⁾³⁾されている。本症例は8歳の時に手術を行っているが, 小児期にみられる卵巣腫瘍は比較的稀である。上坊らは, 1971年から1986年の間に15歳以下の女児で卵巣腫瘍で治療を行った24例を報告⁴⁾している。胚細胞性腫瘍が全体の75%を占め, そのうち良性群は83.3%であった。また, 22例のうち3例(13.6%)までが15歳までに卵巣腫瘍のため2回手術を受けていると報告している。Thompson et al. の報告⁵⁾では, Mayo Clinic において62年間(1905年から1967年)に, わずか小児期卵巣腫瘍は53例のみである。その中で, 奇形腫は最もよくみられる腫瘍であり, 53例中20例が奇形腫であったと報告している。また, Van Winter et al. は, Mayo Clinic にて1955年から1992年の間に20歳以下の付属器腫瘍の手術例486例について報告⁶⁾している。その報告では germ cell tumor 86例中 benign cyst (dermoid cyst) は69例, malignant tumor は17例としている。特に, 10歳以下の症例については, neoplastic mass を6例認め, 4例が benign, 2例が malignant と報告している。さらに Henry et al. は, Armed Forces Institute of Pathology

にて治療した20歳以下の卵巣腫瘍患者353名について報告⁷⁾している。その報告では奇形腫が125名(35%)であり、良性嚢胞性奇形腫は71名であった。Malignant teratoma は54例であり、teratoma の43%を占め、悪性化率は高いとしている。9歳以下の症例については、teratoma は20例報告されており、benign cystic teratoma はわずか5例であった。彼らは、若年者卵巣腫瘍の特徴として奇形腫を初めとした胚細胞腫瘍の割合が高いこと、成人卵巣腫瘍と比べて悪性腫瘍の割合が高いことなどを挙げている。

次に、卵巣成熟嚢胞性奇形腫の重量に関して、三国ら⁸⁾は11歳から71歳までの174例を検討している。その腫瘍重量は5g から2,540g まで分布しており平均 225.9 ± 26.3 g であり、200g 以下の比較的小さなものが68.6%を占めると報告している。本症例は8歳と発生年齢が非常に若く、腫瘍重量が770g であり、若年期発生の大きな卵巣成熟嚢胞性奇形腫と判断した。

また、成熟嚢胞性奇形腫における腫瘍マーカーに関し牧野田ら⁹⁾は、各種腫瘍マーカー値を検討し、CA19-9が最も高い陽性率44.4%を示し、次に高い陽性率はCA125の12.5%であると報告している。本症例にてもCA19-9が125.8U/ml と高値を示しており、成熟嚢胞性奇形腫の鑑別診断に有用であると考えられた。また、8歳時の手術時の腫瘍マーカーに関しては、CA19-9の検討はなされていなかったが、CA125が55U/ml と軽度上昇していた。

卵巣成熟嚢胞性奇形腫の15~20%が両側性とされている。本症例では、初回手術11年後に、対側卵巣に成熟嚢胞性奇形腫が発生している。8歳時の手術標本の組織学的検討では、中枢神経の組織が優勢であり、ほかに脂肪組織や毛髪成分が存在したが、すべて成熟成分であり、未熟成分や悪性所見は認めなかった。本症例は幸いにも、いずれの腫瘍にも悪性成分は含まれていなかったが、卵巣成熟嚢胞性奇形腫の悪性転化に関しては種々の報告^{9)~14)}がある。成熟嚢胞性奇形腫が悪性転化を示す頻度は1~2%との報告が多い。悪性転化を来す成熟嚢胞性奇形腫の特徴として以下のことが

報告されている。発生年齢に関し、高階ら²⁾によれば、類皮嚢胞腫184例の平均年齢32.7歳に対し、類皮嚢胞癌の平均年齢は50.8歳と両者の間に約18歳の開きがあるとしている。また、腫瘍の大きさについて、浅地らの報告⁹⁾によれば、本邦報告例のうち小児頭大以上が80%を占めているとしている。さらに、SCC 上昇例に悪性転化例が多いとの報告¹⁰⁾もある。発生側に左右差はみられないが、両側に発生した時には、特に大きい方に注意しなければならない²⁾。

今回我々は、8歳の時に大きな卵巣成熟嚢胞性奇形腫を手術し、11年後に対側卵巣に成熟嚢胞性奇形腫を発生した稀な例を経験した。若年期発症の良性卵巣腫瘍は核出術を行うことが多いが、術後は再発に注意しながら管理することが必要と考えられた。

文 献

1. Linder D, McCaw BK, Hecht F. Parthenogenic origin of benign ovarian teratomas. N Engl J Med 1975; 292: 63-66
2. 高階俊光, 田村 元, 国崎 昭, 伊藤英樹, 渡辺 亘, 堀 保彦, 橋本正淑, 川瀬哲彦, 足立謙蔵. 類皮嚢胞腫の悪性変化(類皮嚢胞癌). 産婦人科治療 1981; 43: 346-357
3. 牧野田知, 三国雅人, 田中俊誠, 土門洋哉, 藤本征一郎, 佐藤利宏. 卵巣類皮嚢胞腫における各種腫瘍マーカー値. 産婦人科の実際 1991; 40: 99-104
4. 上坊敏子, 中原優人, 島田信宏. 少女に多い卵巣腫瘍. 産科と婦人科 1988; 35: 768-772
5. Thompson JP, Dockerty MB, Symmonds RE, Hayles AB. Ovarian and paraovarian tumors in infants and children. Am J Obstet Gynecol 1967; 97: 1059-1065
6. Van Winter JT, Simmons PS, Podratz KC. Surgically treated adnexal masses in infancy, childhood, and adolescence. Am J Obstet Gynecol 1994; 170: 1780-1789
7. Henry JN, Robert DJ. Relative frequency of ovarian neoplasms in children and adolescents. Cancer 1972; 30: 713-719
8. 三国雅人, 牧野田知, 田中俊誠, 奥田俊幸, 土門洋哉, 藤本征一郎. 卵巣類皮嚢胞腫における各種血清腫瘍マーカー値に関する臨床的研究. 日産婦誌 1990; 42: 479-484
9. 浅地 聡, 高橋 啓, 田口勝二, 跡部俊彦, 小島誠介, 木下 佐. 左子宮広間膜転移さらに膀胱壁

- 浸潤をみた，右卵巣類皮嚢胞腫内に発生せる扁平上皮癌の1例。産科と婦人科 1986；53：1435—1442
10. 吉岡知巳，高橋 道，磯部京悦，加藤充弘，田中俊誠，悪性転化をきたした成熟嚢胞性奇形腫3症例の臨床経過について。産婦人科の実際 1994；43：751—754
11. 金森崇修，白井孝昭，立山一郎，藤澤一郎，門田永治，播磨敬三，橋井康二，森 崇英，術前動注化学療法が奏効した扁平上皮癌合併卵巣皮様嚢腫の1例。産科と婦人科 1996；63：1729—1733
12. 池ヶ谷温美，山田 寛，林 伸行，村松弘巳，利光 敏，悪性変化を示した卵巣皮様嚢腫の1例—扁平上皮癌と移行上皮癌の合併例—。産科と婦人科 1991；58：307—310
13. 野口聡一，沼本篤男，國富 衛，米澤 優，川田清彌，悪性変化を示した卵巣類皮嚢胞腫の1例およびその術前診断に関する文献的検討。癌の臨床 1993；39：1497—1502
14. 島 功，卵巣類皮嚢胞腫の悪性変化に関する検討—腺癌の1症例ならびに臨床的および病理学的考察—。産婦人科の実際 1993；42：281—286
(No.7955 平10・5・15受付)
-